

冒険教育の授業設計に関する研究

—沖繩をフィールドにした冒険教育の可能性—

松尾 美香*・河合 史菜¹⁾・望月 雅光²⁾

岡山理科大学教育推進機構基盤教育センター

1)岡山理科大学教育推進機構基盤教育センター

2)創価大学経営学部経営学科

(2023年10月31日受付、2023年12月4日受理)

1. 問題と目的

大学のユニバーサル化により、多様な学生が入学してくる。多様な学生とは、例えば、目的意識を持たずに進学する学生、授業に興味・関心を持っていない学生、基礎学力に課題が残る学生、いじめや不登校を経験したことによって人間不信になっている学生、受動的・消極的な学習方略を志向する学生である。その一方で、予測困難な時代といわれる社会に耐えられるように、大学教育において、「汎用的能力」の涵養が求められている。例えば、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」という汎用的能力で構成されている「社会人基礎力」（経済産業省，2018）が示されている。このような汎用的能力を育成するために、大学ではカリキュラムや教育方法の改善を進めつつ、様々な教育実践が行われている。このとき、各科目が涵養できる汎用的能力をふまえてカリキュラムを設計することが重要である。

多様な学生に対応しつつ汎用的能力を育成するための教育方法として、第1著者と第3著者は、冒険教育に着目している。本研究では、冒険教育を「自然を背景として行われる野外活動や冒険活動に伴う危険性、チャレンジ、ストレスなどの要素を活かして、自分と『他者』や『自分自身』との関係についての見識を深める教育」（小森，2011，P2）と捉えている。なお、危険性とは安全性を担保した危険に感じる状況を指す。冒険教育と野外教育を区別する際の違いは、①自然環境の中での活動が中心であり（Ewert & Sibthorp, 2014；井村，1999；小森，2011）、予測困難な要素が含まれること（Ewert & Sibthorp, 2014）。②実際の状況にかかわらず参加者が危険やリスクを感じること（British Council on Outdoor Education, 1989；Ewert & Sibthorp, 2014；小森，2011）。③活動の難易度が高いこと（黒澤，2014；井村，1999）。④危険やストレスにチャレンジできること（井村，1999；小森，2011）。⑤自分と他者との関係や自分自身との関係について見識を深めることができること（小森，2011）の5つである（松尾他，2021）。海外では、冒険教育を取り入れた、主に新入生を対象にしたアウトドア・オリエンテーション・プログラム（Bell & Williams, 2010；McGarry, 2020）は、社会的スキルの向上、帰属意識の向上を目的として実施されている（松尾他，2021）。一方、日本では、初等中等教育において、遠足や少年自然の家での宿泊学習などの形で野外教育が取り入れられているものの、大学教育では、キャンプ体験の実践程度にとどまり、冒険教育を本格的に取り入れている事例は散見される程度である（松尾他，2021）。

先行研究をふまえて第1著者と第3著者は、冒険教育を組み入れた新入生オリエンテーションの実施とその教育効果の検討（松尾他，2022）、冒険教育を取り入れた実習の授業設計とその教育効果の検討（松尾他，2020）を行ってきた。しかしながら、これまでの実践研究により、いくつかの課題が明らかになっている。その一つが、上述した冒険教育の特徴である①～⑤を教育プログラムの中にどのように担保すればよいかである。この課題に対して、本稿では、「多様な冒険教育プログラムを体験できる最適なフィールドはどこか」、「この①～⑤の条件を満たすことができる冒険教育プログラムは何か」という2つの問いを立てた。前者の問いの仮説は、「自然が豊富で、海と山での体験活動ができる地域として沖繩が最適ではないか」である。後者の問いの仮説は、「2章に後述する体験プログラムが条件を満たすのではないか」である。そこで、体験プログラムを実地調査した上で、冒険教育プログラムに組み入れることができる体験プログラムを検討し、

それをもとに授業設計を行うことを目的とした。

2. 研究の方法

ここでは、調査対象と調査方法について述べる。

2-1 調査対象

本研究の調査対象は、以下に示す沖縄本島において実施されている次の(1)～(4)の4つの体験プログラムである。これらの体験プログラムは、冒険教育として機能することを想定して選定したものである。

(1) シーカヤック

沖縄本島の北部地域において実施されているシーカヤックの体験プログラムを調査する。今回の体験プログラムを提供しているシーカヤックガイドは、経験豊富であり、安全性が高い艇を利用していることをホームページから事前に確認している。この体験プログラムは、スタート地点である真喜屋運動広場駐車場（沖縄県名護市真喜屋）の側にある海岸から古宇利島（沖縄県国頭郡今帰仁村）への約8kmのコースである。Google Mapを用いて作成したコースの概略を示す地図を図1に示す。このコースは、海岸線に沿っているため、途中で、上陸して休憩できるように考えられている。

(2) リバートレッキング

沖縄本島の北部地域にある「やんばるの森」（やんばる国立公園）において体験できるリバートレッキングを調査する。リバートレッキングは、ヘルメット、およびウエットスーツを着用した上で、ライフジャケットを装着して渓谷に入っていく、滝を目指して浅い川に沿って歩き、必要に応じて川や沢の水に入りながら歩いて登っていく活動である。リバートレッキングの利点は、五感を使って自然を満喫できることであり、川の水量が増えない限り、多少の天候不良でも問題なく実施できることである。リバートレッキングガイドは、野外での事故や災害に対応できるWMA野外災害救急法の有資格者であり、自然環境の変化に迅速・柔軟に対応し、万が一の時にも冷静な対応が出来る技術と経験を有している。「やんばるの森」には豊かな亜熱帯照葉樹林が広がっており、希少かつ固有な動植物が数多く生息し、渓流域には、周期的な冠水と減水を繰り返す水環境に抵抗した溪流植生が発達している（環境省 沖縄奄美自然環境事務所, 2022）。このような手つかずの自然を利用した体験プログラムが提供されていることが大きな特徴の一つである。なお、「やんばるの森」を含む「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」は、2021年にユネスコ世界自然遺産として登録されており、今後も自然環境が保護される地域である。

調査する体験プログラムは、途中2つの滝を越えて、ゴール地点に設定した滝を目指すプログラムである。ゴール地点で行う滝の上から張られたロープを使用したジップラインは、特にチャレンジ性が高い。ゴール地点から、出発地に戻る際には、滝つぼへの飛び込みやウォータースライダーも体験できる。なお、訓練を受けたガイドを伴わない観光客がその地域を荒らさないようにするために、正確な場所は公開されていない。

(3) 「つつじエコパーク」が提供するプログラム（プロジェクトアドベンチャー、カヤック、自然観察）

「つつじエコパーク」は沖縄県国頭郡東村にある。やんばるの自然を満喫できる東京ドーム5個分の広大な敷地内において、プロジェクトアドベンチャー（以下、PAという）を含む多様なアクティビティを体験することができる。同施設内にあるPAの施設、ジップラインの施設を使った体験プログラムと福地ダムの湖面を使ったカヤックと自然観察船の体験プログラムについて調査した。

PAは、米国で開発され、1941年ハーン（Hahn, K）によって創設されたOutward Bound Schoolの基礎理

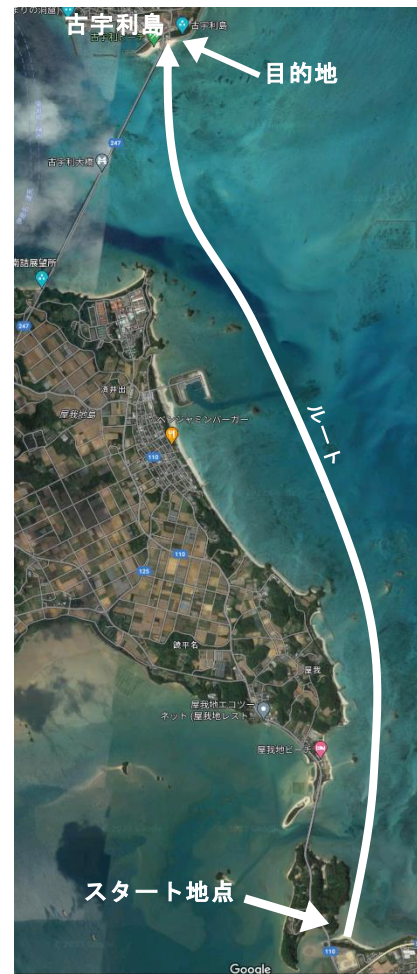


図1：シーカヤックのコース

念や冒険教育的手法をより汎用的なプログラムにしたものである（ショーエル他, 2017）。半日や数日の研修プログラムが用意されており、企業の新入社員研修やリーダーシップ研修、初等中等教育での研修や大学での研修に活用されている。ジップラインは、施設の中に架けられたワイヤーロープにぶら下がり、滑り降りる活動である。ぶら下がる際に、落下防止のためのベルトとハーネスを装着する。同施設には、ジップラインを含めて、29個のエレメントが用意されている。

(4) シュノーケリング（青の洞窟体験）

沖縄県恩納村の真栄田岬（まえだみさき）に位置する「青の洞窟」の体験プログラムを調査する。洞窟の中が美しく、青く輝くことから、青の洞窟と呼ばれている。青の洞窟は、ダイビングやシュノーケリングの定評のあるスポットである。同岬の断崖絶壁の海に面した洞窟であり、ボートで近くまで行くか、海を泳いで行くしか到達できない場所にある。シュノーケリングとは、4点セット（マスク、スノーケル、フィン、ライフジャケット）を用いて、水面上を漂うように移動し、水面下に没することなく水中の様子を観察する活動である（海上保安庁, 2022）。

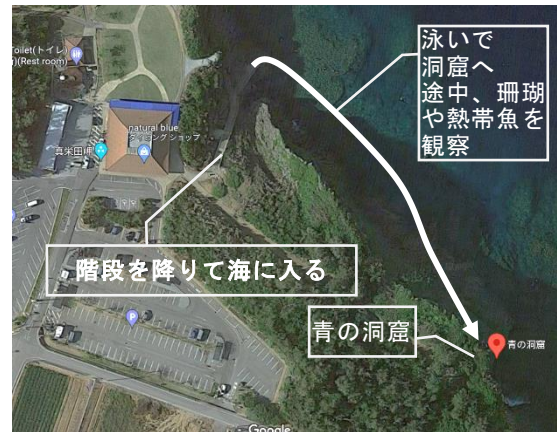


図 2：青の洞窟

2-2 調査方法

1章に述べた冒険教育の定義に含まれる要素を生かすことができる活動かどうかを判断するために、著者ら3人が実際に冒険教育プログラムを体験して、参与観察を行った。その際に、安全管理が徹底しているかを確認した。具体的には、体験に参加する著者3名の様子を互いに観察した。そして、教育効果を検証するため、必要に応じてビデオやカメラを使って記録を残した。冒険教育プログラム中において、著者らの特徴ある言動や冒険教育プログラムを提供するガイドの説明を可能な範囲で筆記した。

これらの記録を分析して、費用対効果を勘案しながら、実現可能性を検討した。



図 3：シーカヤック活動（離岸から最初の目標へ）

3. 参与観察の結果

3-1 シーカヤック

8時半頃、集合場所に到着した。そこで、シーカヤックガイド（以下、ガイド）と合流した。駐車場から、海岸まで、2人艇のカヤック2艇を運んだ。数日前に大型の台風が通過したため、海岸に到着するまでに何本かの倒木があり、それを避けながら運搬した。海岸に到達した時点で、艇をその場において（図 3①参照）、その横で柔軟体操を行い、シーカヤック活動に備えた。その後、パドル操作についてガイドから説明を受けて動作を確認した。そして、ライフジャケットを装着し、艇に乗り込み、準備に移った。艇の後ろ側に乗る人が舵を操作することになる。舵の操作は足で行うため、調整を行った。

調整が完了した後に、艇に乗り込み、1艇ずつ離岸した（図 3②参照）。一つの艇には、第1著者とガイドが乗り込み、もう一つの艇には、第2、第3著者が乗り込んだ。最初に、後者の艇が出発した。2艇が出発し、合流した時点で、最初の目標が指定された。まずは、沖に見える小さな島を目指した（図 3③参照）。波は、穏やかであり、流れも緩やかであったことから、順調に艇を進めることができた。

目標とした島の近くに到着した時点で、小休憩をとった（図 4 参照）。波も穏やかであったため、そこで、

水分を補給し、身体を少し休めることができた。途中にある複数の島や岩礁などを眺めることができ、自然体験を楽しめる時間となった。



図4：シーカヤック活動（海面での休憩中の様子）

いくつかの小さな島の間を抜けると、全長1,960mの古宇利大橋が見えてきた（図5①参照）。海水の色も変化してきた。そこで、少し艇を止めて休憩した（図5②参照）。その間、ガイドの案内でウミガメの存在に気づいた。その際に、カメラを海中に沈めて、撮影した写真が図5③である。海水の透明度が高く、ウミガメを鮮明に撮影することができた。自然の中で活動しているという実感が得られる場面であった。ウミガメとの遭遇時間は短かったが、心が癒やされる瞬間となった。その後、橋を左側に捉えながら、目的地を目指した。



図5：シーカヤック活動（古宇利大橋とウミガメ）

目的地に着くまで、綺麗なエメラルドグリーンの海を見ながらシーカヤックを漕ぎ続けた。時折、予想せぬ大きな波が来て、艇を揺さぶることもあったが、その都度、艇の向きを制御するなどの対応をすることで乗り越えることができた。その際、著者の一人が、カメラを落として慌てた瞬間、艇が不安定になり転覆しそうになったが、ぎりぎりまで立て直すことができた。仮に艇が転覆しても逆転するだけで、艇自体は沈むことなく浮き続ける構造になっている。



図6：シーカヤック活動（古宇利ビーチ）

景色を楽しみながらの活動は、時間の間隔を狂わせるのか、気づくと目的地が見えてきた。目的地には、海水浴客が多く、衝突を避けながら、一艇ずつ上陸した。その時の様子を図6①②に示す。白い砂浜と透明度の高い海水であった（図6③参照）。

では、これまでシーカヤックの活動を行ってきた奄美大島での体験プログラムと比べて、何が違うのかを検討する。まず、目視により奄美大島に比べて海水の透明度が高いことがわかった。また、奄美大島でのシーカヤックのコースは、時折、大型船が通過する航路に近いので、大きな横波が押し寄せ、横波が落ち着くのを待ったり、艇の操作が困難になったりすることがあった。今回の沖縄のコースは、浅瀬の部分が多く、大型船に遭遇することがないため、初心者でも容易に艇の操作ができる。また、雨天時においても、その状

況に応じて、シーカヤックを実施できるフィールドがいくつか存在することである。

3-2 リバートレッキング

9時頃に、集合場所に到着し、リバートレッキングガイド（以下、ガイド）と合流した。その後、ガイドの車で体験プログラムが実施される場所へ移動した。車の傍で、ガイドが用意したヘルメット、ライフジャケット、ウエットスーツに着替え、靴底がフェルトでできた専用のシューズに履き替えた。荷物も分担して運ぶため、防水バックが配られた。準備が整い次第、出発となった。一般の観光客と一緒に行動した。

川への入口は、ここから入るのだろうかと思えるほどの細い道であり、草をかき分けながら進み、川に到着した（図7①参照）。そして、川に飛び込む形で、川に入った（図7②参照）。沖縄と思えないくらい冷たい水であったため、水温に体を慣らしながら進んでいった（図7③参照）。



図7：リバートレッキング（川に向かい、入る様子）

最初の滝を目指して、歩き始めた。そしてすぐに、支流に入った（図8①参照）。途中、水辺にはたくさんの水生生物が生息しており、地域ごとの固有種の動植物を観察できた。川の中を歩いて進んだり（図8②参照）、岩の上を歩いたりしながら進んだ。足場が少ないルートもあるため、慎重に足を運ぶ必要があった。夢中で歩いていると、轟々と水しぶきをあげる最初の滝にたどり着いた（図8③参照）。滝の水しぶきの中に入って水の勢いを確認し、滝の横側を登って行った。

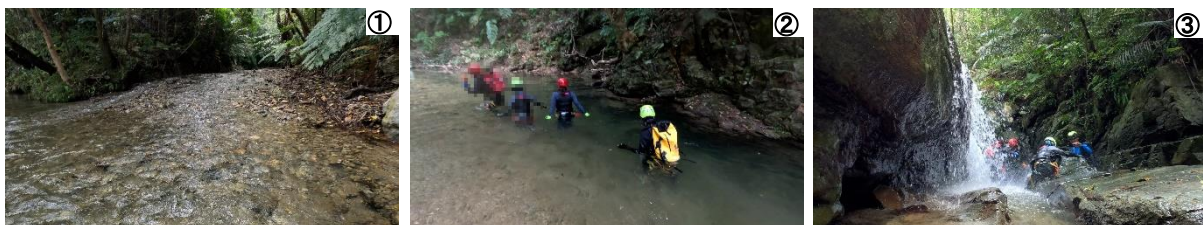


図8：リバートレッキング（川の中を最初の滝に向かって進む）



図9：リバートレッキング（最初の滝）

しばらく川の中を進むと、2つ目の滝に着いた。そこでは、川を逆行するように歩くシャワークライミングにチャレンジした。滝の中に入るとヘルメットが耐えきれないほどの水圧であった。また、水圧によって、身体を流れ落ちる水しぶきで視界が遮られるほどであった（図9①参照）。水しぶきの中の岩を握って、身体を持ち上げようとしたが、水圧が身体全体にかかってうまく登れない。腕の力が徐々になくなり、岩を握っていた手を放してしまい、滝つぼに落ちてしまった。無理だと判断し、そのチャレンジを諦め、滝の横の岩場を登ることになった（図9②参照）。それでも自力で登ることができず、最後は、ガイドのサポートに

より、引き上げてもらった（図 9③参照）。

同様に、しばらく川を登っていくと目的地の滝に到着した（図 10①参照）。先ほどまでの 2 つの滝より大きく、高所から水が落ちている。ここで休憩を取り、ガイドがその場で調理した沖縄そばを昼食としてとった（図 10②参照）。野外で、かつ川に浸かりながらの昼食は非日常であり、心が癒される時間となった。ここでは、2 つのアクティビティを体験した。一つは、滝の左側の岩を横から登り、そこから、滝つぼに飛び降りるアクティビティ（図 10③参照）、もう一つは、滝上から滝つぼまで、登山用の太いロープを張り、ジップラインを設置し、それを使って滝から滝つぼに降りるアクティビティ（図 11①参照）である。前者は希望者がチャレンジし、後者は、全員がチャレンジした。さらに希望者は、ラペリングと呼ばれる方法で、滝上の崖から滝つぼにめがけてロープで降りることを試みた。

滝つぼへの崖からのジャンプは、見た目以上の高さであり、勇気を出さないとジャンプして飛び降りることができない。恐怖心を拭えない場合には、低い場所から飛び込めるポイントからジャンプする。高所が苦手な場合は、無理にチャレンジする必要はない。

ジップライン用のロープが張られている滝上への移動は、途中、台風の影響による大きな倒木があり、その上を歩いて移動することになった。大きな倒木が橋として機能していた。



図 10：リバートレッキング（目的地の滝での活動）



図 11：リバートレッキング（ジップライン、滝つぼへのジャンプ、ウォータースライダー）

昼食後は、登った滝を下り、スタート地点に戻る。途中、2 つ目の滝に戻ると、滝の上にある岩場から滝つぼに飛び降りた（図 11②参照）。高さからの恐怖で足がすくんだが、それでも周りの掛け声もあり飛び込むことができた。滝つぼの水深は身長以上あり、沈んでから水面に戻るまでに時間がかかり、水圧で鼻に水が流れ込む場合もあった。なお、このジャンプは、それぞれの状況に応じてチャレンジ内容を決めることができるため、強要されることはない。この活動を終えて、川を下っていくと、最初の滝つぼに戻ることができた。ここでは、ウォータースライダーを体験した。図 11③の滝の流れに身を任せて、滝を滑り台にみたてて、ほぼ、直滑降で滑る必要がある。水量が多く、臀部が流されるほどの体感したことのないスピードであった。この活動も滝つぼへのジャンプ同様に勇気が必要であり、最初は躊躇する場面も見受けられた。

すべての活動には、勇気とチャレンジが必要であるが、それを乗り越えて一歩踏み出すと美しい景色が広がり、達成感を与えてくれた。

3-3 つつじエコパークが提供する体験プログラム

13 時半頃につつじエコパーク（以下、パークという）へ到着した（図 12①参照）。はじめに、担当者と合流し、パークの施設概要や PA に関する説明を受けた。この担当者は、PA に関する専門的な訓練を受け、PA ではファシリテーターの役割を担っており、PA 進行イメージや必要時間、雨天時の対応などを確認した。その後、担当者に同行し、パーク内にある施設を見学した。（図 12②③参照）。パーク内には、バンガローや宿泊棟があり、宿泊が可能である。続いて、各 PA 専用設備を回り、活動内容を確認した。PA 専用設備に

は、ローエレメントと呼ばれる高さの低い施設（図 13①参照）とハイエレメントと呼ばれる高さ 8m～10m の施設（図 13②参照）、そしてジップラインの施設（図 13③参照）が、芝生の上に設置されていた。



図 12：つつじエコパークの施設（施設の入り口、宿泊施設）



図 13：つつじエコパークの施設（PA、ジップライン）

自然に囲まれた開放的な場所に設置しているロープコースを使って、グループでの課題解決活動や個人でのチャレンジ活動が期待できる。施設の広さ、専用設備の多さ、やんばるといふ自然環境に触れることができ、冒険教育を実施するための条件が揃っていることがわかった。



図 14：福地ダム（自然観察船、カヤック）

次に、パークから車で 5 分程の場所にある福地ダムのダム湖（福地湖）を調査した（図 14①参照）。福知ダムは、沖縄県最大のダムである。ダム湖は、広大であり、波や潮の影響もなく、静かな環境であった。ダム湖には豊かな自然を満喫できる自然観察船（図 14②参照）が運航されており、やんばるの熱帯照葉樹林の観察が可能である。さらには、カヤックの体験も可能である（図 14③参照）。初心者でも落ち着いたペースでカヤックを漕ぎ進めることができる環境であり、シーカヤックの体験プログラムの実施に向けた事前学習の場として効果的な活用が可能である。

3-4 シュノーケリング（青の洞窟探検）

9 時頃に、海が目に見える、真栄田岬のダイビングショップ（以下、ショップ）に到着した。このショップは、海が近いので、すぐにシュノーケリングを体験できる好立地であった。ショップ内に進むと、海洋教育に関する展示物が並び、教育プログラムを紹介するポスターも数多く掲示されていた。そこでシュノーケリングガイド（以下、ガイド）と合流後、付近のビーチへ移動した。次に、洞窟の周辺を陸地から散策しつつ、真栄田岬の海洋環境やシュノーケリングプログラムに関して、説明を受けた。シュノーケリングの体験にあたり、健康状態の事前確認や同意書への記入を行った。安全管理に対する徹底した姿勢が窺えた。その後、用具の確認、ウエットスーツとライフジャケットを着用し、活動へ万全の準備を整えた。準備が完了後、入水スポットに移動しながら、マスク・スノーケルの着脱方法、着用時の呼吸法について説明を受け、

装着した。岬から海に沿って設けられた長い階段を降りていった。その階段の途中から見た青の洞窟周辺の海の様子を図 15①に示す。多くの観光客が列をなす階段を下るとすぐに海に入れるようになっている。階段の途中で立ち止まると混雑するため、フィン等の装着ができない。そのため、入水後、ガイドが著者2名のフィンを履かせることで、スムーズに活動できるよう配慮されていた。なお、第1著者と第2著者に対して1名のガイドが担当し、事前説明からシュノーケリング終了時まで、目が行き届く体制で行われた。第3著者は、健康状態の事前確認に際して、ガイドから同行を認められず、陸地から可能な範囲で様子を観察した。

海水の透明度が高く、多種多様な生物を間近で観察することができた(図 15②③参照)。どの魚も人慣れしており、近づいても逃げる様子がなかった。



図 15：青の洞窟（海の様子）

シュノーケリング中は、1つのリングブイ（浮き輪）をガイド1名と著者2名が掴み、それをガイドが牽引しながら、青の洞窟まで泳ぎ進んだ(図 16①参照)。ガイドの助言をもらいながら、海中を観察することができた。洞窟内では、薄暗い空間の隙間から差し込む光によって、海面が青く輝き、幻想的な景色を見ることができた(図 16②参照)。また、青い光は海中まで浸透し、海の中をのぞくと、複数の魚の群れを観察することができた(図 16③参照)。その後、洞窟を出て、入水スポットまで、ガイドの誘導で泳ぎながら戻り、陸へと上がった。



図 16：シュノーケリング（青の洞窟内、海面・海中の様子）

以上を踏まえて、従来の奄美大島でのシュノーケリングプログラムと比較する。まず、海洋生物の多様さ、個体数の多さが圧倒的であった。そして、この体験プログラムに加えて、珊瑚の保護などの環境教育やSDGsについて学べるコンテンツが用意されており、発展的な授業につなげることができる。また、ライフジャケットのみならずウェットスーツも着用した上で、少人数に対して常にガイドが同行するなど、安全管理が徹底されていることであった。さらに、天候不良の場合、奄美大島のプログラムでは、室内プールの活用や室内で行う文化体験に変更するなどして対応したが、真栄田岬の東側は大小様々な洞窟や海岸があるため、小雨程度であれば、代替の活動を実施できることを確認した。

4. 授業設計

これまで奄美大島での実習では、自然体験と自然観察、シーカヤック活動、シュノーケリング、野外炊事、地域文化の体験などが含まれており、学生にとって多数の危険かつチャレンジ性の高い内容が含まれていた。しかしながら、野外での実習は天候に左右されやすいため、雨天時に備えて代替プログラムを用意する必要があった。加えて、奄美大島の場合、シーカヤックやシュノーケリングが安全に体験できる体験プログラムを提供できる業者が限られることから発生する課題も存在する。例えば、日程が限定されること、競合他社が存在しないため費用も高くなる傾向があることである。また、シーカヤックやシュノーケリング以外のマ

リンクアクティビティが他に見当たらないため、ひとたび天候不良になると、限られた地域文化の体験に変更せざるを得ない。そこで、フィールドを選定する際には、複数の業者から選択できること、多様な体験プログラムが存在すること、交通の利便性を条件とした。その結果、沖縄が最適であることがわかった。さらに、旅行会社にも調査を依頼し、候補地を検討したが、代替地は見つからなかった。

沖縄での実習では、これまでの活動内容をふまえて、よりチャレンジ性の高い内容に変更した。特に、リバートレッキングの内容を導入することで、自然を身体全体で感じながらチャレンジできるため、学生の成長に寄与することが期待できる。また、川の危険箇所を理解し、ライフジャケットの必要性などの安全管理を学ぶことで、不意の落水を含めた水難教育につながると考えている。さらには、雨天時を考慮し、シーカヤック、およびシュノーケリングの活動は、2回実施することで、少なくとも1回は体験できるように設計している（表1参照）。

表1：授業概要

行程	時間	場所	内容
1日目	11:30	那覇空港玄関	出発
	14:00	つつじエコパーク	到着
	14:30	つつじエコパーク	プロジェクトアドベンチャー体験 (17:30 終了)
	18:00	つつじエコパーク	振り返り
2日目	8:30	つつじエコパーク	出発
	9:00	福地ダム	到着
	9:30	福地ダム	やんばる自然観察船 (11:00 終了)
	13:30	福地ダム	福地ダム カヤック体験 (15:00 終了)
	16:00	福地ダム	出発
	16:30	つつじエコパーク	到着
3日目	17:00	つつじエコパーク	振り返り
	7:30	つつじエコパーク	出発
	8:30	道の駅羽地	到着
	9:00	源河川	リバートレッキングⅠ (15:00 終了)
	16:00	源河川	出発
	16:30	道の駅羽地	到着
	16:45	道の駅羽地	出発
4日目	17:30	つつじエコパーク	到着
	18:00	つつじエコパーク	振り返り
	7:30	つつじエコパーク	出発
	8:30	真喜屋運動広場	到着
	9:00	真喜屋運動広場	シーカヤック (11:30 古宇利島到着予定)
	13:00	古宇利島	シュノーケリングⅠ (15:00 終了)
	16:30	古宇利島	出発
5日目	17:30	つつじエコパーク	到着
	18:00	つつじエコパーク	振り返り
	7:30	つつじエコパーク	出発
	9:00	真栄田岬	到着
	10:00	真栄田岬	シュノーケリングⅡ (11:30 終了)
	14:00	真栄田岬	出発
	16:00	那覇空港	到着 (解散)

5. まとめ

本稿では、沖縄本島のフィールド調査を通して冒険教育の可能性を検討し、そこで提供できる冒険教育を活用した授業設計を行った。その結果、本稿で提案する授業では、チャレンジ性の難易度をふまえた多様な冒険活動を配列することができた。多少の雨天時においても、冒険教育の体験プログラムを提供できることが確認できたことから、従来の実習において顕在化していた課題を解決できる。また、従来の実習より多くの学生が参加可能になり、危険性やチャレンジ性の高い冒険教育の活動を提供できるようになる。ところが、沖縄はリゾート地であるため宿泊費は高い。その対策として、「つつじエコパーク」のような公共施設を活用することで、宿泊費を抑えられる。それに加えて、同施設から各体験プログラムへのアクセスが良いことから移動の費用も軽減できる。

しかしながら、本稿で提案する教育プログラムのチャレンジ性が増すため、身体と感情の両面が、学生の学びにどのように影響するのかその関係性が検討できていない。特に、危険にチャレンジする際の感情と学

びの関係性が不明である。また、実際に学生が体験した際、従来の実習と比較してどのような教育効果の差異があるのか確認できていないため、今後も引き続き、検討していきたい。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 20K02444, 20K02984 の助成を受けた。

参考文献

- 1) Bell, B. J., Holmes, M. R., & Williams, B. G. : A Census of Outdoor Orientation Programs at Four-Year Colleges in the United States. *Journal of Experiential Education*, 33(1), 1-18. (2010).
- 2) British Council on Outdoor Education : Outdoor education -Definition and philosophy. *Journal of Physical Education, Recreation and Dance*, 60(2), 31-34. (1989).
- 3) Ewert, A. W., Sibthorp, J., & Sibthorp, R. J. : Outdoor adventure education: Foundations, theory, and research. Champaign: Human Kinetics, 12. (2014).
- 4) 井村 仁 : 『改訂キャンプテキスト』日本野外教育学会 (編) 杏林書院, 17-21. (1999).
- 5) 海上保安庁. 「スノーケリングを楽しむ方へ」. ウォーターセーフティガイド. <https://www6.kaiho.mlit.go.jp/watersafety/snorkeling/index.html>, (参照日 2023 年 10 月 30 日). (2022) .
- 6) 環境省 沖縄奄美自然環境事務所. 「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島世界自然遺産 (詳細版)」. <https://kyushu.env.go.jp/okinawa/amami-okinawa/awareness/pdf/a-6-j.pdf> (参照日 2023 年 10 月 30 日) (2022).
- 7) 経済産業省 我が国産業における人材力強化に向けた研究会-報告書. 「我が国産業における人材力強化に向けた研究会-報告書」. https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/13022278/www.meti.go.jp/report/whitepaper/data/pdf/20180319001_1.pdf (参照日 2023 年 10 月 30 日) (2018).
- 8) 小森伸一 : 「野外教育の考え方」星野敏男・金子和正 (監修) 『野外教育入門シリーズ第 1 巻 野外教育の理論と実践』杏林書院, pp. 1-11. (2011).
- 9) 黒澤 毅 : 「冒険教育の効果」星野敏男・金子和正 (監修) 自然体験活動研究会 (編) 『野外教育入門シリーズ第 5 巻 冒険教育の理論と実践』杏林書院, 19-27. (2014).
- 10) 松尾美香・望月雅光・松下佳代 : 「シーカヤックを活用した冒険教育の大学生への教育効果」『大学教育学会誌』42(2), 39-48. (2020).
- 11) 松尾美香・望月雅光・松下佳代 : 「大学における冒険教育の教育的意義についての一考察-冒険教育研究の動向と展望-」『京都大学高等教育研究』27, 57-67. (2021).
- 12) 松尾美香・望月雅光・松下佳代 : 「新入生オリエンテーションに組み入れた冒険教育の教育効果-プロジェクトアドベンチャーの実践を通して-」. 『大学教育学会誌』44(2), 73-83. (2022).
- 13) McGarry, J. : An Environmental Scan of Outdoor Orientation Programs at Universities in Canada (Doctoral dissertation. Laurentian University of Sudbury). (2020).
- 14) Schoel, J., & Maizell, R. S. : Exploring islands of healing: New perspectives on adventure based counseling. *Project adventure*. (2002).
ジム ショーエル & リチャード・S. メイゼル : 『グループの中に癒しと成長の中の場をつくる葛藤を抱える青少年のためのアドベンチャーベースドカウセリング』坂本昭裕 (監修) プロジェクトアドベンチャー・ジャパン (訳) みくに出版 (2017).

A Study on Lesson Design for Adventure Education

— The Possibility of Adventure Education in Okinawa —

Mika Matsuo*, Fumina Kawai¹⁾, and Masamitsu Mochizuki²⁾

*Center for Fundamental Education, Institute for the Advancement of Higher Education
Okayama University of Science*

*1) Center for Fundamental Education, Institute for the Advancement of Higher Education
Okayama University of Science,*

1-1 Ridai-cho, Kita-ku, Okayama 700-0005, Japan

*2) Department of Business Administration, Faculty of Business Administration, Soka University
1-236 Tangi-machi, Hachioji-shi, Tokyo 192-8577, Japan*

(Received October 31, 2023; accepted December 4, 2023)

In this paper, we conducted a field study in Okinawa to design an adventure education curriculum. Based on the results of our on-site investigation, we formulated the curriculum. As a result, we decided to introduce five elements into the adventure education program: 1) Project Adventure, 2) Sea Kayaking, 3) Snorkeling, 4) River Trekking, and 5) Blue Cave Exploration. Compared to traditional methods, these activities incorporate a higher degree of sensory engagement and adventure, which is expected to enhance educational effectiveness. Furthermore, these activities have been adjusted to be feasible even in slightly adverse weather conditions.

Keywords: Adventure Education, Course Design, Educational Effectiveness, Generic competencies